

株式会社アドバンテスト

2024年3月期(2023年度)第3四半期決算説明会 質疑応答要旨

2024年1月31日(水)

- Q: 2024年のSoCテスト市場、メモリ・テスト市場のアプリケーションごとの見通しはいかがか。また市場シェアの見通しと、売上総利益率の考え方もあわせて教えてほしい。
- A: SoCテスト市場では、生成AI関連のロジック半導体向けのテスト需要が確実に成長すると見ている。またアプリケーション・プロセッサ(APU)向けでも、2024年後半には当社の顧客が新しいプロセスノードに移行する可能性が高いことから、モバイル関連の需要も上がっていく見込み。しかし一方で、現状の顧客内のテストはフル稼働までには至っておらず、テスト市場は2024年後半に需要が伸びていくと考えている。メモリ・テスト市場では、HBMやDDR5といった高性能DRAM向けが当社にとって大きな市場になると考える。加えて、2024年後半から不揮発性メモリ向けもある程度回復してくると見ている。2024年の当社の市場シェアの見通しとしては、SoCテスト、メモリ・テストともに2023年と同等の50%台後半は確保できると考える。その際の売上総利益率の考え方としては、2024年前半はメモリ・テスト需要が強く、SoCテスト需要は低調なことから、収益性に対する製品ミックスは2023年度レベルから大きな変化がないと予想する。2024年末に向けてSoCテスト需要の回復と共に、製品ミックスの改善が進むと考える。
- Q: テスタ市場が2022年並みに回復する時期は、前回の説明会で少し遅れている見通しを説明されていたが、2024年のテスト市場について最新の見方はどのようなものか。
- A: 2024年には2022年並みにテスト市場が回復するというシナリオを2023年初頭に見込んでいたが、想定以上に市場の立ち上がりが遅延した。2024年は、AI向け半導体の高い需要に対して半導体メーカーの供給能力が上がることで、SoCテストもメモリ・テストも需要が増加していくと見込んでいる。2024年のテスト市場も、当社推定のレンジ上限値では、52億米ドルと、2022年と同レベルになるチャンスはあると見込んでいる。ただし2022年のテスト市場との違いは、メモリ・テスト市場の占め率が2024年はより高まっているということ。メモリ・テストの増収は見込めるものの、残念ながら収益性の面で2022年度並みに到達するには、少し追いつかない部分があるということを当社の課題として認識している。
- Q: 2023年度の売上予想を上方修正した要因の一つがHBM向けテストの売上増額だと思う。2Qの決算説明会や昨年11月のIR技術説明会と比べ、需要の見通しがどう変化しているのか。今回の増額はHBM向けテスト需要見通しによるものか、御社の生産能力が増えたからか。

A: 11月頃の段階で既にHBM向けの需要は盛り上がっていた。昨年末にかけて顧客内で2024年までを見据えた計画が固まり、当社は顧客より2024年末までの設備投資のフォーキャストをいただいている。それは当社が3か月ほど前に見通していた需要よりも一段と上がっている感じがある。2024年末までに関しては高い需要が通年続くと考えている。2025年も高水準な需要が継続すると思うが、まだ明確には見えてはいない。顧客自身もテストの調達計画がはっきりと決まっていないと推測される。

このようなことから、2023年度の売上予想は3か月前の想定より増額したが、現状は依然として供給能力には制約がある。需要増に対応するため、当社は一段と生産能力の増強に取り組んでいる。昨年秋頃と比較し、来年度はテストの生産能力を台数ベースで2倍程度まで引き上げていく必要性がありうる。しかし一方で、需要変動は常に起こり得るため、生産においてもなるべく平準化し、なおかつ顧客要求を満たすような形で供給能力を高めていきたい。

Q: 例年は4Q売上が3Q比で増加する傾向にあるが、2023年度はSoCテストの4Q売上が3Q比で一段下がる予想となっているようだ。成熟プロセス品向けテストの売上見通しの低下が主因と推測しているが、改めてその理由と確度を教えてほしい。

A: 4QにSoC、特にスマートフォン関連の半導体向けのテスト需要が高水準となる傾向が例年あった。しかし2023年度は、3Qで多少の前倒しの出荷要求があったものの、その継続性は担保されてはおらず、現状はスマートフォン関連のテスト需要が弱含んでいるため、4Qの売上高は前四半期比で減少する予想となっている。

Q: 2Qの決算説明会では、「回復時期は7月時点の想定に対して6か月から9か月ほど遅れる可能性がある」とのことだったが、この状況に変化はないのか。変化があるとすれば、どのアプリケーションか。

A: 2023年度は車載・産機向けが、コンピューティング・通信向けと比べて堅調であったものの、足元から今後の見通しは弱含んでいることに加え、スマートフォン関連の需要の低調な状況がSoCテスト全体の回復を遅らせている。

Q: 2024年後半でのSoCテストの回復時期の見通しについて、ビジビリティはどの程度あるのか。製品リードタイムが半年ほどであれば、ある程度確信を持てると思うが、回復時期がさらに後ろ倒しになるリスクはどのように考えれば良いのか。

A: テスタの納期は正常化しつつあり、機種や構成にもよるものの、およそ2か月から6か月の間に収まるようになってきている。したがって、当社の製品リードタイムの長さから2024年の後半に回復するという見方ではない。SoCテストの需要回復時期が2Qの決算発表時点からさらに後ろ倒しになっているのは、車載や産機向けの需要の弱含みが見えているため。ビジビリティに関しては、市場というのは常に変化するので正確には難

しい。しかしながら、これまで得た経験値や顧客の次のデバイスの計画などを鑑みて、現状の計画を出している。

当社は顧客に設置された当社テストの稼働率をモニターしている。足元では、設置済みのテストの構成をスマートフォン向けのテストから HPC/AI 向けの構成にアップグレードする動きが見えており、テストの稼働率上昇に貢献している。ただし、稼働率がピークに達し、テスト本体として需要が高まるのは 2024 年の後半と見ている。

Q: 半年前、3 か月前、そして現在と、顧客のテストはどのような稼働率で推移しているのか。

A: 具体的な数値ではお伝えできない。2023 年の春頃が非常に低く、底であった。そこから比較すると戻ってきている。稼働率のピークというと 90%とかその程度の水準だが、そこに達するにはもう少し時間がかかると見込んでいる。

Q: 2024 年後半から HPC/AI 向けや APU 向けのテスト需要の回復を見込んでいるとのことだが、仮にこの時期が前倒しになると、何がきっかけになり得るか。例えばモバイルの台数があまり増加しなかったとしても、AI 機能の強化が進展すると、御社にとってはポジティブなのか。

A: 半導体業界では、AI 半導体について旺盛な需要に対して供給が追いついていないのが現状だ。大手ファウンドリは年初から増産体制に入っており、今後供給が拡大すれば、テスト需要の増加につながる。ただし、増産は計画通りに進むと考えられ、早まる可能性はあまり大きく見ていない。モバイルについても、スマートフォンへの高性能な AI 機能の搭載、普及が進めば、需要回復が早まる可能性はあるものの、現時点では需要回復の前倒しへの確信度合いは高くない。モバイルをはじめとした、エッジデバイス向けの AI 機能の強化に向けては、半導体市場への新たな参入者向け事業機会にも期待している。

Q: 昨今話題になっている AI スマホについて、御社の受ける恩恵は何か。

A: 現時点でも、一部のスマートフォンでは AI コアが APU に組み込まれており、今後具体的な AI を活用するユースケースが増えることで、スマホの買い替え需要が刺激される可能性もある。さらに産業界においては、消費電力削減、処理負荷軽減、個人情報保護の観点からエッジ・コンピューティングに AI を活用する期待値が高まっている。これらの動きが本格化すると、AI が半導体の需要をけん引すると見込む。足元では、APU 向けから HPC/AI 向けへのテスト転用が、テストの余剰消化につながっているが、今後はこれにエッジ AI 向け需要が増えることで、業界に大きな成長が見込めると考える。

Q: システムレベルテスト(SLT)の事業見通しについて教えてほしい。

A: スマートフォン向け SLT 需要は、これまで需要が軟調であったが、顧客の生産数量増加に基づくテスト投資と新規顧客の獲得により、需要がやや回復した。2023 年度は前年度比横ばいの需要見通しであるものの、この 3Q の需要回復のサインをポジティブに見ている。来期についての需要はまだ不透明であるが、スマートフォン関連の市場の回復によるテスト需要増を期待している。また、HPC 向けで顧客が歩留まり向上を目的に SLT を採用することも期待している。短期的な見通しについては言及しにくいものの、長期的には SLT ビジネスの拡大を見込んでいる。

Q: 昨年 11 月に米国競合が大手プローブカードメーカーとパートナーシップを結んだと認識している。御社ビジネスへの影響はいかが。

A: テスタとプローブカードはオープンエコシステムというのが、半導体サプライチェーンでの共通認識。テスタとプローブカードの選定は、半導体メーカーである顧客が行っているため、プローブカードメーカーに競合が出資したとしても当社テスタを選定することに直接的な影響はないと考える。ただし競合が消耗品ビジネスに興味を持っているということは、当社がグランドデザインで述べている「統合したテスト・計測ソリューション」と同様の考えと推測している。そういった競合の動きを見ながら、当社も対応を検討していく。

以上

※本資料に記載されている内容は、決算説明会の質疑をもとに当社の判断で要約したものです。また本資料には、将来の事象についての、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれております。これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務状況や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって明示されているものまたは暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。